

70周年を迎えた神戸演劇鑑賞会

米田 哲夫 (竹の台)

戦後間もないころ、うたごえ運動、労音、映画サークル、そして労演が誕生して若者たちがその担い手として文化運動に参加しました。1949年に全国で初めて演劇鑑賞組織大阪労演が生まれ、その5年後の1954年に神戸と名古屋に同様の組織の勤労者演劇協議会(会員が会費を持ち寄り誰の手も借りない会員主体の自主的な演劇鑑賞団体)が発足しました。数えて70年。その間、700回の演劇上演してきている。私は1962年以来、62年ほど演劇を鑑賞してきました。そして、このHPを活用させてもらって幾つかの演劇を紹介させていただきましたが、まだ、紹介しきれない感動の舞台がいくつかあるので、記憶をたどって紹介していきます。



この6月に前進座公演「文七元結」(三遊亭圓朝原作、小野文隆演出)が上演されるのにちなんで、76年に上演された『さぶ』(山本周五郎作十島英明演出)江戸下町の職人の物語(前進座はすでに NO. 23の中村梅之助で紹介しています。)ぐずでとんま、能無しと言われるさぶ、男前で頭がよく切れる栄二の二人が励

ましあっていく若者の物語。ひよんなことから店を追い出され身を落とす栄二を辛い世界を知っているさぶが励ましていく。周五郎のどん底に落ち込んだ人間の励ましや温かみを感じさせてくれる舞台。前進座の若手俳優の気取らない演技が、当時の若者たちに生きていく優しさや共感を覚えさせてくれた名作で、今もなお語り続けられています。97年にも舞台が再演されています。

古くなりますが、66年の『天平の薨』(井上靖作、宮川雅青・小宮一郎演出)。まだ発展途上にあつた日本、新しい文化を取り入れようと当時の大国中国へ遣唐使を派遣していました。日本の若い僧たちが、身を賭して国のために中国へ渡り、命がけの使命感は20余年かけて高僧鑑真を迎えます。来日した鑑真は目を失いながらも唐招提寺を建立させていく物語です。

河原崎長十郎、中村かん右衛門、河原崎国太郎たち前進座創立者たちの熱演もあって大きな感動を与えた舞台でした。私はこうした苦難に満ちた日中の交流の歴史見るとき、今日の不安定な日中時代、天平のような日中の文化や政治の平和な交流が求められているといつも感じています。